

メキシコ

中部地震から

復興を目指す

## サンタクルス村

2017年9月に発生したメキシコ中部地震により、甚大な被害が生じたプエブラ州サンタクルス村。トセパン協同組合による「100棟の住居再建プロジェクト」が実施され、今も復興が進んでいる。そうした中、女性グループが復興事業の一環として、市場の開設を要請。当時、村に常設市場がなく、週1回の市では主に果物が販売されるのみ。人々は毎日の食材の調達に困り、地元の生産者にとっても産物を販売する機会が限られていたが、今、念願だった市場の建設が行われている。村人が力を合わせ、市場を建設していく様子について、サンタクルス村のNGO団体の代表のジェセニアさんに話を聞いた。

村人の生活に必要な市場を建設するために、サンタクルス村はトセパン基金、バノルテ銀行と提携して資金を確保。市場建設が決まると、その建築様式について村で投票が行われた。「近代的な建物か、それとも環境に配慮した建物にするか」が問われ、最終的には環境配慮型の市場建設に決まった。

村人が力を合わせ

## 市場建設中



現在、木材、竹、土などの建築資材は、

すべて地元のものを使って建設が進められている。木材は地震による地滑りで倒れた木を再利用することで、山の木を切ることなく調達。壁には竹の枠組みをつくり、石灰、砂利、そしてサボテンの粘液を混ぜた土で塗り固めていく。作業には18歳以上の村のすべての男性と、希望する女性に参加している。村人に広く恩恵が及ぶ市場づくりのため、村長がシフトをつくり、皆が少しでも関われるようにしている。

村人自身の手による市場建設の取り組みは、地震で倒壊した家屋の再建事業でも実践されている。再建を急げば、村外からの建築資材の調達、外部労働

力への依存にもなってしまう。そのため、サンタクルス村では労働力として多くの地元住民を雇い、家づくりの技能習得が促された。また、地域伝統の土壁が失われないようワークショップを開催して、村の伝統や風景が維持できるよう工夫をしている。こうした取り組みも、「村人が家族や親戚のように協力し合う人口1300人の村だからこそ、できる」と、ジェセニアさんは語る。

2021年6月頃オープンする市場では、村の特産品のアマランサスや洋ナシなどの果樹を栽培しているグループの産品が販売されることになっている。さらに、ジャム、お酒、地元の民芸品の販売や、市場に設けられる食堂では、家庭でもつくり手が少なくなった地元食材を生かした伝統料理も提供するなど、楽しい企画が盛りだくさん。村人みんなが市場のオープンを心待ちにしているという。



建設中の市場。ここではメキシコの国家的植林プロジェクト「センブランド・ヴィダ」によって生産された商品も販売される予定だ。



生産者の共同作業による歩道づくり